

称号及び氏名	博士（人間科学）水野 杏紀
学位授与の日付	平成24年3月31日
論文名	「東北鬼門」観の成立と展開に関する研究 —中国から日本への伝播を踏まえて—
論文審査委員	主査 大形 徹 副査 大平 桂一 副査 斎藤 憲 副査 白幡 洋三郎（国際日本文化センター）

論文要旨

本論文は、古代中国で形成された「東北鬼門」観に関し、その成立と展開を考察するものであり、殷から清にいたるまでの文献、出土資料、遺物などを対象としてその形成を考察し、中国における宇宙観の一端を明らかにするとともに、それらがわが国に与えた影響の源泉を考究するものである。

第一章の序論では、研究の背景と目的、研究の方法と対象とした資料、先行研究、論文構成を解説した。第二章から第九章が本論、第十章が結語・今後の課題を記載している。

第二章「古代における鬼・門と方位区分」では、鬼と門の意味を殷の甲骨文字や後漢の『説文解字』などから考察しており、甲骨文では鬼＝賊害と関連づけられ、『説文解字』巻九上では、死＝婦＝鬼と関連づけられたことを指摘している。一方、門は甲骨文では、王朝にとって内なる神聖なる世界と、外なる世界を隔てる重要な境界を示すものとされた。最古の天文算法書とされる『周髀算経』には太陽の出没位置の変化から創出された十二区分、八区分が記されているが、それにもとづき、東北の方位は夏至に太陽が昇り照らす北よりの方位であり、太陽至るところとその逆に北の太陽の至ることのない幽と明の境界でされたことを論じている。

第三章「東北方への方位観と都城の東北方重視」では、紀元前 3500 年頃のものとする玉片の図像から春秋分、夏至・冬至の太陽の出没方位によって八方位を定める方法の萌芽が古い時代に遡る可能性があることを指摘している。殷の都城や王陵における東北部の特徴として、鄭州商代城址をもとに、中軸線からやや東北－西南への傾き、王の居所である宮殿区を都城全体の東北部に配置、都城の城壁の東北の隅切を考察している。また、殷代後期の殷墟、王陵区では、墓の多くが正北よりやや東への傾きなどを挙げている。これらを踏まえ、殷王朝は東北を太陽が昇る象徴の方位として尊崇し、それが都城や王陵などの空間構成、配置、方位、形状などにみられる東北部の特異性につながったと結論づけている。また、前漢の司馬遷『史記』封禪書記載の神明の舎をとりあげている。神明とは日、太陽の意であり、

これにもとづき前漢の長安城の東北方に神明の舎として五帝廟がつくられたことを論じている。

第四章「東北鬼門と太陰太陽暦・二十四節気」では、東北鬼門が文献に登場するのは後漢頃であることを述べている。関連文献として、王充『論衡』訂鬼篇にひく『山海経』、蔡邕『独断』、応劭『風俗通義』祀典第八、『論衡』乱龍篇、『太平御覧』卷九六七、果部四にひく『漢旧儀』などを挙げた。ここで東北鬼門が鬼を駆逐し、凶魅を防ぐための大晦日の歳時と関係付けられたことを指摘している。また、前漢以降、月と太陽の運行を組み合わせた太陰太陽暦、太陽年をもとにした二十四節気などの暦法が整備されたが、一年の始まりは立春頃とされたこと、『論衡』などに記されたこの大晦日の歳時は冬を去らせ、春の季節を迎えるための重要なものであったことを述べている。さらに、『史記』律書、『史記正義』の記載から、一年も一日も寅に始まり丑に終るとされ、前漢には丑寅間は一年、一日の循環における終始の重要な境界とされたことを論じている。

第五章「十二支に割りあてられた月・方位・禽獣」では『礼記』月令、『周礼』夏官、『論衡』解除篇、劉安撰『淮南萬畢術』などを挙げ、大晦日頃には厲鬼、疫鬼が出現するとされ、それらを祓う歳時が行われ、祓う装置が宅地に施されたこと、新たな年、新たな春を迎えたことを述べている。十二支に十二の月に割りあてると大晦日は丑寅間にあたり、そこは厲鬼、疫鬼が出現するとされた。十二支に十二の方位を割りあてると、寅は東北東、丑は北北東となり、丑寅間は東北方にあたる。こうして丑寅間に年が移り変わる境界と、方位の両義性が与えられ、東北は鬼の出現する門、鬼門とされたことを論じている。十二支は十二禽獣も割りあてられた。『後漢書』礼儀志中には、「是の月や、土牛六頭を國都郡 縣城外の丑の地に立てて、以て大寒を送る。」、後漢の蔡邕『月令章句』には「是の月は之れ建丑、丑は牛たり。寒將に極まらんとす。是の故に其の物類形象を出だして、以て之れを送達するを示し、且に以て陽を升らせんとす。」とあり、ここにおいて、丑は月としての十二月と、方位としての北北東に加えて、禽獣の牛の意味が付与され、丑の月に丑方位に土牛を立てる歳時を行い、春の陽気を迎えることができることとされた。かくして東北方は方位を示すと同時に、年が改まる境界をも示し、そこに禽獣などを配し、冬の寒気を祓い、新たな春を迎える特別な意味が付与されたことを述べている。また、唐の長安城の事例や「宅経」の記載から、季節を表象する植物などを対象方位に配する都城や屋舎の空間構成のする意義を論じている。

第六章「式盤からの東北鬼門の考察」では式盤の鬼門の記載に着目した。後漢の「六壬式盤」には、地盤の丑寅間に「己鬼門」とある。文献においても東北鬼門が登場するのは後漢であり、従って「東北鬼門」観は後漢頃に成立したことを指摘している。また、後漢の「六壬式盤」、六朝の「六壬式盤」には戌亥間に天門とある。(北西の)戌亥間を天門としたのは北西に高く東南に低い中国大陸の地勢と関連して名付けられたことを述べている。

第七章「式盤にみる時空構造」では、二次元の平面盤である式盤を通して形成された、古代中国における宇宙観について論じている。東北丑寅間鬼門—西南未申間人門については、『五行大義』の著者である蕭吉に関連した『隋書』列伝・蕭吉伝を挙げ、季節や陰陽が大きくかわる要であり、季節の循環の境界軸とされたことを指摘している。

また、『淮南子』齊俗訓の「古えから今に至る時間を宙といい、四方上下の空間を宇という」を挙げ、二次元の平面盤に記された式盤の四門の意味を以下のように推察している。『淮南子』には「宇宙の宙は古えから今に至る時間」とある。過去→現在→未来の直線的流れを丑寅間東北—未申間西南の斜線(45°の傾き)を引き、円と線の接点を循環の境界とし、それを基準として過去から未来の流れを二次元で表現する。一方、『淮南子』には「宇宙の宇とは四方上下の空間」とある。縦横高の三次元空間を戌亥間北西—

辰巳間東南の斜線（45°の傾き）を引き、空間の高低深淺を示し、この斜線を地上空間の天地を貫く中心軸として二次元で表現することを指摘した。式盤は時空を二次元でとらえる方法であったが、人は式盤を通じて時間と空間の相関を表現し、宇宙を具象化し、それらを通じて時空を言語化する方法を獲得したことを論じている。

第八章「立春基準年初の考察」では六朝の「六式式盤」において、丑寅間に東北鬼門艮とあり、東北鬼門に『易』の艮卦が附されている。東北鬼門は『易』の艮卦によって論理補強され、普遍的な万物の循環、死生の原理を付与され、その境界の意が付加されたことを指摘している。また、丑寅間—未申間の南北軸に対する45°の傾きは、立春を年初基準とした太陰太陽暦と不可分の関係であることを論じ、古代中国の都城が築かれ、太陰太陽暦が形成された黄河流域の気候との関連を挙げ、古代中国では春とはっきり認識できる春分ではなく、冬から春へのわずかな変化が感じられる立春を春の始めとし、立春頃を年初したことを指摘している。一方、古代西方の暦は春分頃を年初とする暦はあるものの、立春頃を年初とする暦はみられない。中国大陸では大寒頃の北方シベリアからの寒風が厳しく、立春過ぎから徐々に弱まる。立春頃を年初とする太陰太陽暦とは黄河流域の自然条件の変化と符合させたもので、十二月の疫鬼を駆逐する神荼、鬱壘を門戸に畫く歳時とは、冬の極寒風を去らせて春の暖風を迎えるために行われるものであったことを論じている。

第九章「中国における東北鬼門の変遷」では、六朝から唐代頃の「道教經典」における鬼門、東北鬼門に関連した記載を考察し、鬼門は鬼（死者の霊）出入りする門とされていたこと、死=鬼という想念の継承がみられたこと、また、鬼を封じて壅塞するところとされたこと、六朝から唐代にかけ、こうした鬼門の思考が浸透していったことを指摘している。また、北西戌亥間天門—東南辰巳間地戸は地上空間の天地を貫く中心軸とされたが、明の北京城など都城造営において実践的に用いられた。さらに唐代の敦煌「宅経」、明清の「宅経」を考察し、「道教經典」では東北鬼門は壅塞するところあったが、この思考が「宅経」へ継承されていることを論じている。明、清「宅経」では東北鬼門あるいは東北の門を開くと鬼が入る、あるいは怪異があるとされているが、この記述が福建省などの城壁の形状に影響を与えたとの何曉昕の指摘があり、今後の検討課題として挙げた。

敦煌「曆書」の曆注には（スタイン 612、「大宋國太平興國三年應天具注曆日」（978））、方位図の四隅にはそれぞれ東北鬼門艮他、四門が記されていた。これは六朝の「六壬式盤」と同様の記載であり、式盤の宇宙観の継承を指摘している。また、敦煌「曆書」、「丁酉歳具注曆日」（唐乾符四年（877））には、「推十干得病日法」とあり、五つの鬼形が描かれている。これと平安中期に成立したとされる惟宗允亮著『政事要略』第二十九、年中行事十二月で『漢旧儀』に引く神荼、鬱壘に関する東北鬼門の文に附載された疫鬼の姿との類似点を指摘していた。

第十章「結語」では、これまでの東北鬼門が空間領域のなかで論じられていたこと、それでは本質的な理解ができない、東北鬼門が一年の境界、冬春の境界と不可分の関係として形成されたものとし、そこに本研究の独自性があることを述べ、最後に今後の課題を挙げている。

学位論文審査結果の要旨

学位論文題目「「東北鬼門」観の成立と展開に関する研究—中国から日本への伝播を踏まえて—」について、本審査委員会は、人間社会学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下のように評価するという結論に至った。

(1) 研究テーマが絞り込まれている

研究テーマは「東北」の方角と関連する「鬼門」である。日本でもよく知られているこの言葉は、術数関係の書物をはじめとして、中国および日本のさまざまな文献にあらわれる。重要な意味をもつことは認識されていたものの、中国、日本において鬼門をテーマにした著書はおろか単独で鬼門をとりあげた論文すらない。これまで本格的に考察したものが皆無であるなかで、本論文がはじめて鬼門の成り立ち、構造、展開について詳細に考察したといえる。本研究は、「東北」および「鬼門」に関して「古代における鬼・門と方位区分（第二章）」、「東北方への方位観と都城の東北方重視（第三章）」、「東北鬼門と太陰太陽暦・二十四節気（第四章）」、「式盤からの東北鬼門の考察（第六章）」でとくに詳しく考察されており、よく絞り込まれたテーマであると評価できる。

(2) 論文の方法論が明確である

本論文では、鬼門について、空間および時間の観念を中心に分析している。さらに「鬼＝死者の霊」にもとづく死生の原理に関わる宗教観念をくわえて考察している。また鬼門の観念の歴史の変遷をおっている。また、日本に伝わったあと、どのように展開し、現代に到っているかについて、補論の「日本における「東北鬼門」観の受容と変容の一考察」、「新井白石『鬼門説』翻刻と解題」、「東北鬼門の現代的展開」において綿密に実証している。その際、文献資料だけでなく、式盤などの考古学資料なども積極的にとりあげて考察している。文献と考古学資料の両面から考察するという方法論は妥当であり、また説得力のあるものであると評価できる。

(3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている

本論文のテーマである「鬼門」そのものについては、中国および日本に専著もなければ専論もないという状況である。そのなかで本論文は、陰陽道、民俗学、建築史学、家相学、科学史、さらに都城関係の著書や論考、「東北」という方角に言及した論文、太陰太陽暦や二十四節気などの暦に関する文献等々を丹念に蒐集し、それらの基礎の上で考察を行っている。必要な領域における重要な研究によく目配りをきかせているといえる。

(4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している

基本文献としては、中国の経史子集にわたる歴大な古典がある。それら以外に道教文献や敦煌などの仏教文献、絵画資料、考古学資料など、対象となしうる資料は数多い。文献に関しては原典までさかのぼり、最善のテキストを用い、絵画資料や考古学資料に関しては、出土地点の明らかなもの、由来の確実なものを用いている。また中国や日本のさまざまな地域を訪れ、自身の手で写真撮影するなどして、自分の目を見た信頼できる資料を蒐集しようとしている。研究の素材となる文献、資料、調査データなどは、十分に吟味しているといえる。

(5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している

「鬼門」そのものについて先行研究がほとんどない状況で、本論文は多角的に鬼門を考察している。まず、東北の方位は夏至に太陽が昇り照らす北よりの方位であり、太陽至るところとその逆に北の太陽の至ることのない幽と明の境界であったことを論じている。つぎに殷王朝は東北を太陽が昇る象徴の方位として尊崇し、それが都城や王陵などの空間構成、配置、方位、形状などにみられる東北部の特異性を生み出したと述べている。さらに『史記』律書、『史記正義』の記載から、一年も一日も寅に始まり丑に終るとされ、前漢には丑寅間は一年、一日の循環における終始の重要な境界とされたことを論じている。この寅と丑の間は平面に表せば、東北になる、と述べる。また、二次元の平面盤である式盤の図を通して時間と空間があらわされていることを指摘し、さらに古代中国における宇宙観について論じている。六朝になって「六壬式盤」には、丑寅間に東北鬼門艮とあり、東北鬼門に『易』の艮卦が附されていることを指摘している。これは東北鬼門が『易』によって論理補強され普遍的な万物の循環、死生の原理を付与され、その境界の意が付加されたことだという。一方、六朝から唐頃の「道教経典」における鬼門、東北鬼門に関連した記載を考察し、鬼門は鬼（死者の霊）出入りする門とされていたこと、死＝鬼という想念の継承がみられたこと、また、鬼を封じて壅塞するところとされたことを指摘している。これらの考察によって得られた知見は、これまでの簡単な論考には全く見られなかったものである。

(6) その知見を裏付けるための必要にして十分な議論と実証が展開されている

本論文は、一步一步、着実に考察を重ねていくというスタイルをとっている。その議論の方法も穏当で破綻がない。また考えるだけのさまざまな角度から考察を試みており、この方面からの考察も必要だといった指摘を受けることがない。これは筆者の周到な性格によるものであろう。また各章ごとに、その章の内容が的確に要約されており、それを確認しつつ、次の章へと進んでいくことができるようになっている。また議論に用いた資料は最善のテキストを用いている。さらに多くの考古学的資料によって文献の裏付けがなされている。これらのことから、数多くの知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されているとあってよいだろう。

(7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である

これまで鬼門に関する研究は全く貧弱なものであった。これだけよく知られた言葉でありながら、それを正面から論じた著作、論文は皆無であった。そのなかで、本研究のはたした役割は非常に大きいといえる。鬼門をたんに東北という方位のことにとらえずに、式盤という道具を介して、丑寅という時間軸と重ね合わされたと論じたところに、本研究の独創性を見いだすことができる。つまり、鬼門は時間と空間をあわせもつ観念としてとらえられ、その影響はたんなる方位として問題をはるかにこえるということである。本研究によって鬼門に関する研究は飛躍的に進んだといえる。今後、鬼門のことを述べる際、本研究を看過することは許されないであろう。鬼門研究の新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文であるといえる。

以上のような評価を踏まえて、本審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断する。